

運命の赤い瞳 Special Edition

P.L.U.S. ～ ^{うたかた}泡沫の幸^せたち ～

CONTENTS

にとり編・ありのままの魅力 3

白蓮編・苦しみと救いと 45

小傘編・しあわせは、いつもすぐ近く 81

早苗編・if ～ ^{うたかた}泡沫の幸^せ ～ 107

登場人物紹介

シン・アスカ

本編終了後の番外編「運命の赤い瞳 P.L.U.S.」の主人公。本書の物語は、自身が幻想郷に迷い込む原因となった異変を解決した後、苦悩した末に兵士であることをやめて、自らの意思で幻想郷にとどまることを選んだ後の物語。ともに生きる少女によっていきさつは少々異なるものの、いち早く幻想郷の生活に馴染もうと努力を重ねているのは共通している。

東風谷早苗

守矢神社の風祝の少女。半人半神の現人神であり、神の力を引き出して様々な『奇跡』を操ることができる。シンとは同い年。早苗編は異なる世界の住人同士でもあるシンと恋に落ちる禁忌の葛藤を乗り越えた後の物語で、シンと暮らすようになってからはともに守矢神社で神職を営んでいる。

河城にとり

エンジニアを生業としている河童妖怪の少女。その卓越した機械修理の知識と腕前は、仲間の河童とともにモビルスーツを完全に修復してしまうほど。

にとり編ではシンと作業小屋で、毎日を過ごしている。

聖白蓮

元人間であったが、種族としての魔法使いとなった女性。外見は二十代程度ではあるものの、唯一の肉親だった弟、命蓮を失った悲しみから不老の体となった超常の存在。法界上空で命蓮寺の弟子たちと行動をともにしたシンに助けられて以降、ある大きな理由から何かと彼を気にかけている。

多々良小傘

付喪神の傘妖怪。外見と言動は幼いが、体のスタイルは分不相応に起伏に富んでいる。シンとはある異変がきっかけで出会った間柄。普段は命蓮寺周辺で過ごしているが、小傘編ではシンやにとりがいる作業小屋に時折遊びに来る無邪気な女の子。

ありのままの魅力

「暑いな……」

「暑いね……」

妖怪の山のふもとに流れる川の横で、河城にとりとシン・アスカはそろってうめく。二人は木陰でうだるような暑さとまぶしい日光をしのいでいた。

季節は夏だ。シンは半袖の私服で、にとりは薄手の作業着を着ている。

だがそれでも、この炎天下と高い湿度の中ではまるで無意味だ。日に焼けた肌はジリジリと痛み、肌も少しだけ浅黒くなったような気がする。今日の仕事——にとりの持つ技術を目当に依頼される機械の修理作業の事だ——をしようにも、この暑さではままならない。

「うげー熱い……このままじゃマジで死んじゃいそうだ……河童は人より熱に弱いんだぞ……」

「なんでこんな時に発電機が壊れるんだよ……河童の技術力は世界イチじゃなかったのか？」
「だからといって壊れないわけないだろう。技術力ならどんな人間にも負けないけど、わたしら河童が作っているやつのはとんどは、『外の世界』から来た技術を流用したデッドコピーなんだ。元々売りモンって奴は、ある程度使い込まれたら壊れるように出来てるんだよ。当然じゃないか」

「そ、そんな怒るなよ」

にとりはいらだたしげに反論してきた。普段はおとなしい少女ではあるが、熱さのストレスで余裕がないのだろう。河童は人間よりも外部の気温や水温に敏感らしく、それもあってカリカリとしているらしい。

「俺にかまわず、河童たちの集落に行つて来いよ。水の中なんだからそっちの方が快適だろ？俺は作業場で留守番でもしてるからさ」

シンは汗だくの彼女の顔を眺めながらそう提案する。

河童はもとも水の中で生きる妖怪だ。

にとりが普段地上で過ごしているのは、生業なりわいである機械いじりを行なうためであつて、別に無理をして地上にいる理由はない。発電機が壊れて引き受けている仕事ができない以上、避暑目的で水の中に戻るのは当然と言える。

「バカ言うな、お前を残して自分だけ楽しろつて言うのか。私はそんなのゴメンだっ」

「だというと思つた」

シンは半ば予想できていた返答を前にして頭をかいた。こういう子なのだ、にとりは。自分だけいい思いをすることになったら絶対に反論してくる。

この頑固で思いやりのある性格が彼女のいいところなのだが、融通が利かないのが欠点でもあつた。発明や機械いじりに関してなら非常に柔軟な考えを持つというのに。

「んー……こうなったら一緒に水でも浴びれるような場所に行くか」

「は？」

「下流の方なら流れが穏やかで、木陰も広いところもあるし、そこで涼まないか？ あそこなら一緒に泳げるくらい深さもあるし」

「うーん……でもお前、水着持っていないだろ。私の服は防水仕様だし、泳げるけど……裸で泳ぐなんて言うなよな」

「……やっぱ、ダメか？ べつに全部脱ぐわけじゃないんだけど……」

「当たり前だろ！ 私はな！ 外で裸になるその人間の男の文化がいつちばん理解できないんだッ！ 誰かに見られるかもしれないって言うのに素肌をさらしてッ、ハレンチだッ！ 下着だけでも許さないからなッ！」

にとりは爆笑しそうな勢いでまくしたてる。別に丸裸になるわけでもないというのに、にとりの前で少しでも脱ぐことになったら彼女は一番に気にしてしまう。

河童は人間よりも恥ずかしがり屋が多いらしく、いつも服の下にしているスクール水着によく似たレオタード状の水着も、肌をなるべく隠すことで羞恥心目的で着ているのだとか。

よってシンが豪快にパンツ姿になって川に飛び込むのはにとり的にはNGらしい。

「別にいいだろ!? 俺だつてこの暑さで死にそうなんだよ！」

「だからと言って認められるか！ 裸になりたいなら風呂でやれ！ どうしても水浴びたいな

「からお前も河童の水着着ろッ！」

「ぜーったい、やだ！ 女性モノしかないじゃないか!? サイズだって合わないんだからむちやくちや言うなッ!!」

「だったら私もぜーったい認めない！ お前のそういう無神経なところが前々から気に食わなかったんだ！」

「なんだと!？」

「なんだよ!？」

お互いに「「ぐぬぬぬ………!!」と歯を食いしばって睨みつけあう。完全に熱さでお互いの沸点が低くなってしまうているのだが、シンもとりもそれを自覚するほどの余裕はない。今日ばかりはにとりの神経質なその言葉に対し、腹が立ってしようがなかった。

「あーやや。今日もイチャイチャしていますね、貴方たちは」

「「なんだよッ!？」」

そのとき、頭上から面白そうにつぶやく少女の声が聞こえた。

二人そろって顔を上げると、そこには黒いミニスカートと白いブラウス姿の天狗少女、射命丸文しやめいまるあやがいた。彼女は器用に木の枝の上で寝そべりながら、面白そうなものでも見るように自分たちを見下ろしている。この気温でも余裕ぶっている涼しげな顔が、ある意味羨ましい。

「なんだよ射命丸しやめいまる。高みの見物のするくらいなら、こっち降りてこいよっ」

にとりが呼ぶと文はそれに対し「はい」とのんきそうに応えた後で、木の枝から軽やかに跳んだ。空中で体をひねりながら、見事に自分たちの前に着地するその一連の動作はまるで新体操の選手のようにだ。

その後で、文はいつも浮かべている気さくそうな笑顔をこちらに向ける。

「毎度おなじみ、天狗の新聞記者の射命丸文ですッ！ 今日ヒマだったんで、お二人の様子を隠し撮りに来ちゃいました。見た感じ今日もラブラブしているように見えたんですけど」

「少しは真意を隠せよこのパラッチ天狗！ ってか、お前にはさっきまでのあたしらがそんなように見えたのか!？」

「カッカしないでくださいよにとりさん、かわいいロリ顔が台無しですから。……っていうか、さっきから貴方たちの会話見てたんですけど、どう見てもバカップルそのものですよ……？ 二人きりをいいことに何やってるんですかみせつけてるんですか。独り身としては妬やけちゃいますっ」

せつかちらしい文はジト目で自分たちを一瞥した後、後半の言葉を早口でまくしたてる。

もしここに地底界の橋姫こと水橋バルスイがいたら間違はなく『妬ましい』を連呼してきたかもしれない。それくらい文は口調こそいつもの丁寧なものだが、どこか黒いオーラが漂っていた。

しかしそれもつかの間、またいつものように目を輝かせたかと思えばブラウスの胸ポケット

にいつも入れているメモ帳を取り出し、ものすごいスピードで何かを書きながら宣言してきた。「まあ、仲いい人たちほど喧嘩するって言いますし……なんなら私の事なんか気にせずにはラブチュウチュウしちゃってください。そのまま恋人らしくやることまでやっちゃえば、私がその瞬間を激写して熱愛報道として文々ぶんぶんまる。新聞の一面に載せちゃいますんで」

「却下だよ文さん！ 人の生活を飯のタネにしないでくださいッ！」

「知りませんでしたシンさん？ 外の世界じゃアポなし突撃取材は常套手段らしいですよ。まあコレをやったら案の定マスゴミって世間からバカにされるらしいですけど」

「分かってんならやめろよ！ ぜっつたいにやめろよーッ!!」

愛用のカメラを手にしてマシンガンのようにはやし立てる文の言葉に対し、シンとにとりは共通の敵に激昂する。こんなにもむかつくのは全部暑さのせいだ。ただでさえ口論で文字通りヒートアップしていたというのに、ここで射命丸文は火に油でしかない。

「……はあ。とにかく、もう冗談はそこまでにしてくださいよ。そろそろにとりがキレて弾幕出すんで」

「あやあ、やりすぎちゃいましたか。実は今日私お休みの日なんで、弾幕勝負はお預けにしておきます。代わりと言ってはなんです……私、お二人にイイ話を持ってきましたよ」

高いテンションを維持したまま文は勝手に話を進める。

そして、いつも提さげているポーチから、一つのチラシを取り出した。にとりが手に取り、紙

面に大きく書かれた文字を読み上げる。

「納涼ミスコンテスト？」

「なんだよ、これ。優勝賞品は賞金で……参加賞が河童特製アイスキャンディー？」

「ええ、ちょうど今の時期暑いから丁度いいかと思つて。シンさんは審査員枠としてご招待したいと思ひます。アイスもタダで出ますし、いいと思ひますよ？」

「……じゃあにとりは？」

「当然エントリーに決まつてるじゃないですか。もう手続きは済ませちゃいましたし、キャンセルは効きません。今更不参加はナシです」

「ええっ!?!」

その発言を耳にした途端に、そろつて大きく動揺する。シンものだが、勝手に話を進めたことをなんの悪びれもなく平然と言ひ放つ文に対して、にとりは先ほどから驚いてばかりだ。

あと何回驚けばいいのだらう。きつと「文、教えてくれ」と訊いたとしても、文は何も言つてはくれない……

「何で私たちが参加しなきゃいけないんだよ！ それにコレ、水着コンテストじゃないか!? 河童の私にケンカ売つてるのか！ このお調子者ッ！」

「あや？ にとりさんは可愛いですからじゅうぶん自信を持つて参加すべきだと思いますけど。それにシンさんを選んだのは、別の世界の方なんでもっとも平等な審査ができる人だと思

ったからです。ちなみに開催は今日のお昼すぎです。にとりさん専用水着も私の方で確保しましたので問題ナシ」

文のあまりに唐突な言葉の連続で、シンもとりさんも思わず頭を抱えた。

「というわけでにとりさん、ちょっとだけお話があります。なあに、作戦会議です。シンさんはここで待っていてください」

「お、おい！ この人でなし天狗！ はーなーせー！」

「そうとも、私は人でなしです。なんせ人間じゃありませんからねっ」

悠々と文はにとりの小柄な体をしっかりと抱きこみ、森の奥へと連れ去っていく。古来、天狗は人をさらう習慣を持っていたと、シンは里の知り合いである稗田阿求ひえだのあきつぐから聞いたことがあるが、まさに今の光景がその通りだろう。さらっていったのは妖怪だが。

「相変わらず、勝手な女の子だよな……文さん」

まさに疾風のように過ぎ去った出来事に対し、脱力感がせり上がってくる。シンはおとなしく言う通りにして、にとりが戻ってくるのを待つことにした。

「にとりさんにとりさん！ これはチャンスです！ チャンスですよー！」

「なんだよ!? こっちは機嫌がお前のせいでメチャメチャなんだッ!!」

森の中に連れ出したあと、文は片腕で抱きかかえていたにとりを地面に下ろす。にとりの顔

は今にもかみついてきそうなほど怒りに満ちていた。

弾幕ごっこでの実力がとりより高い文にとっては、そんな様子も機嫌の悪い非力な子犬のようにしか見えない。むしろ抱き締めたくなるほど愛くるしく見えてしまうがない。

この世界の決闘である弾幕ごっこで勝てば、敗者は勝者の言うことを聞かなければいけない義務がある。だからこそ文がにとりを小馬鹿にもできるしおちよくれるのだ。

「なーに言ってるんですかにとりさん。今日こそシンさんのハートを射止めるチャンスです！ 私の用意した水着で、彼をメロメロにしちゃいましょうッ！」

「はあッ!？」

「そう、この幻想郷の中で、イチバンの美少女の座に君臨するのです！」

決してにとりを貶めるための言葉ではなかった。

文の中で一番かわいらしい河童と言えばにとりだし、いつも一緒にいるシンとの仲を取り持ちたいと思っているのも事実だ。

加えて、外来人と妖怪のカップルが成立したとしてそれを記事にすれば、間違いなく文の出している文々ぶんぶんまる。新聞の売れ行きは好調となる。一石二鳥だ。

「私がそんなの……無理に決まってるよ。私よりかわいいの、この世界にいくらでもいるだろうし……」

「だからシンさんと私が審査員席にいるんじゃないですか。それとなく私たち二人で評価を抑

えればにとりさん以外の方が高得点になるのは防げますし」

「それって八百長じゃないか……!」

「ふっふっふ、勝つためには過程や、方法なぞ、どうでもよいのです。といってもあからさまな低得点をほかの人に出したりはできませんので、ある程度は頑張ってください。大丈夫です……にとりさんの素材はすごくいいですし、里のロリコンの皆さんの心を射止められること間違いないですから」

「途中までマシだったけど今の一言で全部台無しだよッ!」

しかし、ここまで言われてしまえばにとりの中でも少しばかりやる気が生まれているようだ。少しでも真剣に悩み始めているその様子からわかる。

計画通り。文は心の中でまるで死神のような邪悪な笑みを浮かべつつ続けた。

「にとりさんが奥手なのは私も理解していますが、それにしたっていくらなんでも悠長すぎます。男つてのは結構移り気な生き物ですし、今のままじゃシンさん、誰かにとられるかもしれないよ……?」

「……だから、ミス幻想郷になれっていうのか」

文があらかじめ用意していた文句を並べると、にとりは観念したようにそう口にした。思い通りの顔だ。文は頭の中で用意していた次の原稿を読み上げる。

「ええ。そうすれば、もつともシンさんと距離の近いあなたに対し、わざわざライバル心を持

とうとする女の子はどこにもいなくなりますから……それからゆつくりにとりさんのペースでシンさんを自分のものにしちゃえばいいんですよ……私はにとりさんの恋を応援してます」

最後の言葉は本心だ。文にとつてにとりはからかいがいのある女の子だが、少なくとも友人だとは思っている。

せっかちな文としては、さっさとにとりがシンとくつつくところが見たくて仕方がない。だから背中を押すことにしたのだ。シャイなにとりが人前に出ることも肌をさらすことも抵抗感があることはわかっていたが、もうこれしか近道はない。

「……わかったよ」

「その言葉を待っていました！」

——よっしゃあ！ 文は盛大にガッツポーズをとったあと、すぐににとりの右手を両手で包み込んで訴えた。

「じゃ、さっそく準備に取り掛かりましょう、そうしましょう。シンさんと一緒に里へ一直線ですッ!!」

文はにとりの腕を引き、すぐに霊力飛翔でシンの元へと戻る。そのままの勢いで彼の腕もまたつかみ、一気に舞台を空に移す。

「うええっ!? どうしたんだよ文さん！」

「にとりさんの同意も得られませんでしたし、一気に里へゴーイングマイウェイですッ！ 最速で『人

問の里』の会場へ向かいますよーッ!!」

「うわああああああ!!」

文は相手の返答を聞かずに——正確にはあまりの速さに二人の声が掻き消えていたのだが——二人を捕まえた後、背中に折りたたんでいた烏天狗からすてんぐの黒翼を広げて、二人が死なない程度の速度に抑えた上で空を飛ぶ。

何にも縛られないような、晴れやかな気持ち。文だけがそんな気分浸されながら、三人は一陣の風となつて、人間の里へ一直線に飛び去つた。

シンととりは数分間地獄のジェットコースターを味わつた後、ミスコンテスト会場に到着した。目的地である里の広場の一角に下ろされ、まともに立つていられるようになるまで五分程度地面に座り込んだ後で、フラフラと立ち上がる。

すでに準備がほとんど終わつていた正午前のコンテスト会場は賑やかだった。参加席の周りには女の子を一目見ようとしているのか、いち早く観客席についている男たちで埋め尽くされていた。席の周りにはいくつもの屋台があり、気合を入れて呼び込みをしている者もいる。

なにせ文いわく、幻想郷中の女の子がこの場に集うのだ。人間の里ではお祭りや飲み会が盛んだが、今日ほどの盛り上がりもなかなかない。

「関係者口はこつちか……」

シンは控室に向かったにとりたちと別れた後で、そんな喧騒に包まれた会場の裏手を一人で歩いていた。シャツには文から渡されたミスコン関係者用の腕章をつけている。

そして文から渡された地図にしるされた場所へ向かうと、コンテスト本部である白テントが見えた。その下に入って関係者らしい男たちにシンはあいさつをする。

「こんにちは、シン・アスカです」

「おつ、来たな？ 噂の坊やお出ました」

飄々とした態度の男がシンを見るなりそう口を開く。緑色のシャツを着た長髪の優男だ。

文曰く、彼もまた、幻想郷の外から移り住んできた外来人らしい。

「貴方がコンテストの司会ですか？ 文さんから聞いたんですけど……」

「ああ、俺がそのものズバリの司会だ。俺も君と同じように、文ちゃんに誘われたクチさ。今日は目一杯眼福ができるって聞いたから話に乗らせてもらった。よろしく頼むぜ」

そう自己紹介して彼は手を伸ばす。シンもまた遅れて彼の手を取った。気取ったような言葉だが、嫌味などを感じさせないのは彼の朗らかな印象のおかげだろう。その後でさらにもう一人、テントの端でこちらに背を向けて椅子に座っている男性がいることに気付く。こちらの視線に気づいたのか、彼が立ち上がって振り向くと、そこには見知った顔があった。

「やあシン、君も呼ばれたみたいだね」

「霖之助さんじゃないですか、お久しぶりです。でも、なんでここに？ やっぱ文さんに呼ば

れたんですか？」

顔を目にするなりシンは小さく声を上げてしまう。いつも「魔法の森」近くで雑貨屋を営んでいる眼鏡をかけた白髪青年、森近霖之助だった。

「ご名答。人手不足って騒がれたし日当も悪くないから引き受けることにしたんだ。本音を言えば家にいたいし、魔理沙が出ないこう言う催しもよおには興味ないんだけどね」

「じゃあ魔理沙さんが出てたら来るつもりなんですネ……ってか霖之助さんには日当出るのか……」

「はいはい、おしゃべりはそこまでだ。知り合い同士のあいさつも済んだみたいだし、本題に入らないか？ コイツに目を通しといてくれ」

霖之助が肩をすくめた後で、司会の男が自分たちの方へ呼びかけてくる。時間も押しているということなので、彼の言うことに従い、差し出されたクリップボードをそれぞれ手にした。そこにはいくつかのチェック事項が記された紙がはさまれている。

「これはなんですか？」

「採点基準さ。そいつに従って女の子たちの評価を付ければいい。ステージでは簡単なパフォーマンスも許可しているから、それも含めた総合的な判断で頼むぜ」

紙には表情や姿勢といった外見の印象、トークの内容、パフォーマンスの内容など……参加者の良しあしをはかるための基準が記されていた。

——ホントにとり、こういうの大丈夫かな。

シンは今頃控室にいるはずのにとりを思いながら紙をめくり続けた。どんな衣装で出てくるのが少しばかり楽しみだったが、それを顔に出さないように努めるのは案外難しかった。

「にとりさん、準備はできたようですね」

審査員テントとは反対側にある西側の更衣室で、にとりはワクワクしている文のそんな声を聞いた。

今のにとりは文の用意した水着の上に、体を冷やさないう薄いタオルを羽織っている格好だ。辺りにはにとりと同じように、水着の少女たちが自分の出番が来るまで待機している。

「うう……やっぱ、こんな服着るのはやだな」

「大丈夫ですよ！ ちょっと小さい胸でも、それを補う程の可愛さであつという間に優勝できますからっ！ あ、小さい子もいるのでポロリはダメですからね」

「さらつとやなこというなっ！ ってか、するかっ！」

まったく、こいつはいつも他人をバカにして。

シンと自分を付きあわせると言いながら、本当は単に自分をからかっているだけじゃないのかと思ってしまう。

だが文は数少ないにとりの友人だ。

——友だち……か。

確かに自分と文はここ最近、よく話を交わす仲になった。文の事はうざったく思うときもあるが、どこか憎みきれない。

いつも腹が立つような事を言うが、文は親切心から自分をここに連れてきてくれたのだ。だつたら自分のやるべきことは一つだ。

「やるだけ……やってみるよ。でも期待すんなよな。わたしだつてこういうの初めてなんだし」「わつかりましたっ！ まあ、にとりさんが出てくれたおかげで、にとりさんのような子供っぽい体系が好きな人向けに少しでも私の新聞が売れてくれるんで、最低限の目的は果たせるんですけどねー」

「お前とことんサイテーだなッ!？」

——少しでも文の事を考えた自分がバカみたいだ！

にとりは先程までいただいた同情を否定して、怒気を込めた視線を文にぶつける。だが当の彼女は気にしている様子も無くあつげらんとして出口の方へ向かう。

「それじゃ、私はそろそろ審査員席に戻りますね！ 全力で頑張つて下さいー！」

「おい、射命丸！」

彼女は一方的にそう言い捨てて飛び立つ。追いかけてようにもそんなヒマはない。諦めて部屋の一端に座る。

「シン……」

彼の名を呟く。

このイベントの審査員の中に、大好きな『彼』がいる。

自分が好きな人が、自分を見てくれるのだ。

それが意図しない出来事でも、これはいいチャンスではないのか？

「河城にとりさん。控え番号ができたですっ！」

控室の奥から、明るい表情で自分の名前を呼ぶツインテールの少女がいる。おそらく、この

コンテストのスタッフの一人なのだろう。名札に「遥はるか」と記された彼女からエントリーナンバー

の記された名札を受け取り、ビキニの布地にくつつける。

——どうせなら精一杯、このコンテストを楽しもう。

ここまで来た以上、後には引けない。プライドがしっぽを巻いて退くことを許さない。

自嘲気味に口元を上げてから余計な考えを頭から追い出す。にとりは弾幕ごっこで強い相手と戦う時よりも緊張しつつ、自分の出番を心待ちにした。

「お待ちせしましたー！ 射命丸文しめいまる、到着ですッ！」

「天狗なのにどうした。遅れるなって言っただろ、この聞かん坊め」

「あやー、すみません司会さん。ちょっとヤボ用でそっちにかかりきりだったんで……」